去った日常

羅針

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
去った日常

【Ｎコード】
Ｎ８５９６Ｚ

【作者名】
羅針

【あらすじ】
現実逃避を願っても、やっぱり日常が好きな青年と、日常を願っているのに、非現実に巻き込まれる少女のお話

出会い

「う～さみぃ」
今日はクリスマス。彼女と呼ばれるものを持ってない暦１７年。
名前を古見在（こみぞん）という。古見　存。
基本、コミゾンと呼ばれている。
眼は黒、少し赤みがかかっている。髪は白。銀髪のほうがあっている表現だ。
銀髪はロングヘアで肩よりちょっと長いくらい。たまに女の子と間違えられるほどの容姿。
容姿端麗、頭脳明晰。女の子が放っておくわけはないのだが、モテない。
クリスマスに独りというのはとても寒い。ましてや、晩御飯を買いに行くとなると億劫になる。
そう、クリスマスツリーのまわりにはカップルどもがうじゃうじゃいやがるのだ。
（ひっそりとしていろよ！）
心の底で大声を放ち、空を見る
空を雲が覆っていた。
（一雨きそうだな……　それまでにご飯買っておこう……）
ハロ〇ズまで走る。

「ん～」
背伸びをした。ハ〇ーズの近くの公園でご飯を食べて、そのまま立ち上がり背伸び。
カツサンド３パック、ハムマヨサンド６つ、２００ｇ程度の弁当３０個。
「足りねぇな……」
胃袋をどこに持って行ったのだろう。

この世界には特殊な力を持った人物が、１０人いる。
一人は、電撃
一人は、火炎
といった風に、要は超能力（サイ）だ。ＰＳＩ（サイ）を使えるだけで、威張れるのだ。
コミゾンにはこれといったＰＳＩは無い。
ＰＳＩは、
「９９％の才能と１％の活力」があれば引き出すことが出来る人間に最初から備わった力だ。
コミゾンには才能があるが、人生に、完全に無気力だった。
何をするにも無気力・脱力。モテない最大の理由かもしれない。
「何かいいこと起きねぇかな……」
夜空を見上げる。いやな予感がする。
ポツポツと雨が降り始めた。
（やっぱりかぁ）
帰ろ、と言って地面を見たその時、
「危ない」
「は？」
上を見るとそこには一人の女の子が落ちてきた。
「うわわわわ」
お姫様抱っこで救出
「邪魔」
ヒョイっと腕から逃れると、その少女は空を見上げた
「一般人が紛れ込んでるじゃないか、殺す」
「は？」
キュルルルルと回転する矢がコミゾン目掛けて発射された。

キュィィィン！
その矢は兆弾され、打った男へ戻っていく
「邪魔をするな」
「一般人を巻き込むな」
バチバチと火花を散らす二人。男は未だに宙（そら）に浮いている。
サイキッカーか？
少女は手を前にやると「衝撃（ブレイク）」と言った。
次の瞬間、少女は空に舞い、男と対決していた。
コミゾンは腰が抜けて立てなかったが、何とか逃げた。

翌朝

起きた。朝になったので起きる。
「なんだったんだ昨日は？」
独り言をブツブツつぶやいているコミゾン。
「……うにゅ」
「……」
（何も見てない聞いてない。）
地面では昨日であった少女が寝転んで熟睡していた。
「さ！朝御飯食って学校行こう！」
「……私も」
「……」
場が沈黙する。
「返事は？」
「……」
「返事は？」
「いや……その……」
「返事は？って聞いてんの」
「はい。スミマセン」
「よろしい♪」
「……」
こいつ……中1くらいか？
「何歳？」
「19」
「……嘘だろ？」

バッ！っと食べさせるために持たせていたフォークを俺の眼に突き立てる。
「馬鹿にしたな？」

「スミマセン！」
「よろしい♪」
「……」
「ふーん♪ふーん♪」
出していたサラダとパンと順調に食べ進める少女
「なんでここに来たの？」
年上だったとは……
「行くアテがないから」
「……」
（こんな爆弾娘、いらねー……）
「あ、ちゃんと今日出て行くからお構いなく」
「あっそ……」
いつのまにか冷蔵庫の前に行って片っ端から口に詰め込んでいるこの少女。
「名前は？」
「Ｑｐｏ１号」
「……は？」
「あんたには関係ないわよ。固有名はミナトだからそう呼んでくれて構わない
あんたは？」
「古見　存」
「コミゾン？　本名？それ」
「本名だよ」
「そっ」
「んじゃ、俺は学校行くぞ。お前、適当にどっかいけよ」
「は？　あんたは私とこれからデートよ」
「……は？」

12月25日　<AM>

「俺は学校行くぞ。そろそろマジで遅刻する！」
「や～だぁ　デートデートぉ」
「何で、俺に、そこまで、固執するんだ？」
「始めて一緒に寝た人だから（ポッ）」
「誤解を招く発言は止めろ」
「いこーよ　25日にもなって学校なんておかしいよぉ」
「補修だ」
「頭いいのに？」
「テストはまともに……？　なんで知ってんの？」
「貴方のことなら何でも♪」
「俺の名前知らなかったよな」
「あの時はあのときだよ」
キャラ変わってるよな？絶対。
「あ～　もう！　補修行かなかったらマジで落第なんだよ！」
「いいじゃん。」
「よくねぇよ！　お前も早く帰れよ！」
「いーやーだぁ」
「年上の癖に駄々こねるな」
「デートしたいもん」
（なんだこいつ）
「わかった。帰ったら行ってやるから」
「本当！？」
「ああ。うん」
パァっと顔を輝かせ、笑顔で返答する。
ミナトは眼は黄色で釣り眼。
髪は澄んだ透明感がある水色（本当に透明なわけではない）の長めのショートヘア。

寝起きはボサボサだった……
性格はコロコロ変わるからよく分からん。
俺はできるだけ補修を長引かせようと決意して家を後にした

12月25日　<PM>

補習授業が終わり、学校を出て、腕時計を覗く。
「6：20分。」
流石にどこかへ行こうとは言い出さないだろう。
学校の門をくぐり、近くの信号まで来ると、コミゾンは眼を見張った。
「……ミナト？　ミナト！？」
信号の反対側でミナトが腹から血を出して倒れていた。周りの通行人（野次馬）が
とやかく言っているが、人ごみを掻き分け、ミナトの元に辿り着いた。
「あれ……？コミゾン？」
「おまっ！何してんだ？」
「心配……してくれてるの？」
「当たり前だろ！」
「えへへ……っと……」
普通に立ち上がると歩き出した。
「お前大丈夫なのか？」
「平気だよ。これくらいなら。」
銃で撃たれたような傷痕が5～6ヵ所あるのに……無事？
んなやけあるかぁ！
「おい！病院に行かなくてもいいのか？」
「うーん……病院じゃ、傷、治らないし。
もう今日は帰るね」
「……」
じゃっ　っと行って走って帰ったミナト。なんだったんだろう？

１２月２５日　＜ＰＭ＞

家に着いたのが８：４０。遅くなった……
なんだか家に帰りたくなくて遠回りしてきた。
絶対無事じゃないよな。あれ。
「あ～　気になる」
誰にも届かない心配を放ってみる。
その時家のチャイムが鳴った。
「……」
なんだか出たくねぇな……出なかったら物語進まないし、仕方ないか。
「はーい」
「こんばんわ」
「……ミナト？」
どうせこんな展開かと思ってたけどな。
「私はミナトではない。」
「だって！見た目とか同じじゃん！」
「私はＱｐｏ１０号。固有名ナギサ」
「はぁ……」
納得した振りをしておく。
「今日一日泊めてくれ」
「はいはい」
なにこいつら……口調が違うからいいけどさ。容姿同じじゃん！
「んで？今日帰るとか言ってなかった？」
「それはミナト。」
「そういう問題かよ」
「私もあなたと話してみたかった」
「なんで昨日ミナトが泊まったのしってんの？」
「Ｑｐｏ系統は研究所と思考がリンクしている。

それはＱｐｏ全体で共有できる」
「そっか」
「で？何から話せばいい？」
「何から、というと？」
「お前は俺と話したくてここに来たんだろう？」
「分かりました。一つ相談したくて来ました。」
「内容は？」
「私たちＱｐｏを守ってください。」
……私たち？
「何人いるの？」
あ……ノってしまった。
「全部で１００体います。
ある組織で作られ、世に放たれたのですが、
脳リンクが出来ることから2体以上捕まえて兵器として
使おうとする組織が後を立ちません。
なので、私たちをその組織から守ってください。」
「なんで俺なんだ？」
「あなたは世界で一番強い「力」を使いこなせるからです」
「……最弱の「テレキネシス」も使えないのに？」
「はい。」
「それじゃあ　使わせてみてくれよ」
「分かりました」
そう言って俺の腕をつかんだ。
次の瞬間、視界が一転した

12月25日　<深夜>

「ここは？」
「研究所です
ＰＳＩ能力開発をしています。」
「ふーん」
至る所で機械が「ウィィン」と唸りをあげている。
「ここです」
「うわっ　すげぇ」
相当な数のミナトやナギサがいた。
「全て固有名が在ります。覚えますか？」
「遠慮しておくよ」
「やあ　こんにちわ」
「あっ　こんにちわ」
研究所の博士みたいな人が握手を求めてきたので握手をした。
今ってこんばんわだよな？
「君が例のコミゾン君かい？」
「え？あ！はい」
「それじゃ、こっちに来てくれ」
「はい」

機会がいっそう多い部屋に来た。
「これをつけてくれ」
「なんですか、これ？」
「脳波を一定間隔で狂わす機械だ
君にはセンスはあるのに気力がないと聞いた。
今は役目が出来る。それを強く思い浮かべて」
護衛は決定なんだ……
「了解です」

あいつ等を守る……あいつ等を守る……あいつ等……を
「グゥ」
「よし」
俺は寝てしまったようだ

「ここは？」
「あ！おきたぁ　今日は補修ないんだよね？」
「うん。」
「私はミナトだよ！」
こいつ、初めて会った朝は性格怖かったけど……キャラチェンジ？
「そうか」
「私が能力発動まで指南することになってるから」
「オッケー」
「それじゃ、まずはねぇ……ご飯作って！」
「……は？」
そこにはキッチンと冷蔵庫がある。
「私、ご飯作れなくて……」
「はいはい」
俺も腹減ったしな。
「私も食べる」
「あ！　ナギサはだめ！」
「いいよいいよ」
「えーっ」
「ありがとう」
っていうかナギサ影薄いなぁ　気付かなかった。

～1時間後～
炊飯器がなかったからナベでご飯を炊いている。
神経がいる作業だ

〜2時間後〜
これで7回目の失敗だ

〜3時間後〜
米なくなってきたな

〜4時間後〜
もう何回目だろう

「お腹減ったよぅ」
「同じく」
「俺もだ」
「なんで炊けないの！？」
「んじゃお前がしろよ！？」
「……」
「今日はおかずだけにしようか……」
「うん……」
「分かりました」
年上ロリコン顔に囲まれてご飯を食べた。
これから、どんなことをするんだろう？

12月26日　＜AM＞

「無理無理、吐く！」
「逃げるなぁ　特訓だぁぁ」
フッ！っと目の前にナギサが現れる
ガシッ！っと腰を掴まれ身動きが取れなくなる
「しまった！」
「ナイスナギサ！　＜炎よ（パイル）＞」
「ちょ！　ま！ぁぁぁぁぁぁぁ」
ゴァァ　っと炎に包まれて焼け死ぬ感覚を感じた。皮膚あちい！
「殺すきか！？」
「＜引力（アトラクション）＞覚える気あるの？」
「それを言うなら＜反発力（レプリション）＞よ」
「どっちでもいいのよ！　さぁ　使いなさい」
「んな無茶な！」
「あんたなら出きる！さぁ！　＜炎よ（パイル）＞」
「くそ！　＜反発力（レプリション）＞！　ぐあぁぁぁぁぁぁぁぁぁ」
失敗。そろそろ死ねるんじゃないかな？
「こんの役立たず！」
「うっせぇ　なんのヒントも貰ってねぇぞ！」
「それなら、先ず、炎を追い払うイメージと、Ｑｐｏを守るという感覚を持って」
「え？　あぁ頑張る」
「ナギサぁ　面白くないじゃん」
「今のままでは効率が悪い」
「知らないよそんなの」
Ｓめ
「さ！　＜炎よ（パイル）＞」
イメージ……イメージ……イメージ……きた！

「＜反発力（レプリション）＞！！」
炎が方向を変え、ミナトに向かう、それをミナトはパイロキネシスを止めて回避
「やっと出来たわね」
「グア！？　グアア」
脳が焼ける……
「ぐあああああああ！」
焼けるような痛み……なんだこれ……
「能力の反動ね。　博士呼んできて」
「了解」
フッ　っとナギサが消え、次の瞬間、博士を連れてその場に現れた。
「やはりこうなったか。　＜治癒（ヘアリング）＞」
ポァァァっという感覚が頭を撫でる。
徐々に頭の熱が冷えていく感じで痛みは去った。
「なんども力を使えば慣れると思うから、頑張ってみて」
「あ……はい」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8596z/

去った日常

2011年12月29日13時49分発行